

中部の

エネルギーを 築いた人々

三穂村営電気の計画に携わり、
事業を軌道に乗せた村長 林 治郎

長野県下伊那郡の旧三穂村(現飯田市)では、大正11年5月に村営電気事業を開業した。近隣は伊那電気鉄道が電気を供給していたが、山間の孤村である三穂村は供給区域に組み入れられなかった。三穂村では上伊那郡中沢村の村営事業を参考に村営電気を推進した。開業後、村内に発電所建設を計画し協力を求めてきた矢作水力と交渉し、50kWの無償電力の確保を実現し、これにより事業は安定軌道にのった。村営電気事業に当初から関わり、特に矢作水力との交渉で陣頭指揮を取った人物が、名村長といわれた林治郎である。



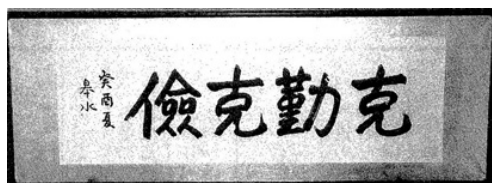
林治郎
(三穂地区自治センター蔵)

林治郎の生涯

林治郎は明治19年9月、三穂村の前身村の一つ、伊豆木村に林富太郎の長男として生まれた。祖父林美射男は伊豆木村戸長で、同22年発足した三穂村の初代村長、父富太郎は第4代の三穂村村長を勤めるなど、林家は村の名家であった。38年4月、19歳になった林は三穂村役場の書記となり、昭和3年2月には三穂村の助役、10年5月村長に就任した。この間、村を挙げての村営電気事業への取り組み、昭和不況下に進められた「経済改善計画」の推進に尽力した。同計画では、村民を苦しめていた無尽講の整理完納、村の隣保相助の施設「厚生館」の建設のほか、昭和7年から全村禁酒運動を断行し、全国的にも知られるようになり、総理大臣斎藤実から「克勤克儉」の扁額が贈られた。林の活躍は県からも注目され、13年3月、請われて長野県北佐久郡経済部出張所長に就任し、以後松筑郡出張所長、南安住郡地方事務所長などを歴任し、農村経済厚生指導に当たったが、



禁酒三穂村の記事
(『南信』昭和8年7月9日、林雄三編「全村禁酒で村おこし」掲載)



斎藤実首相から贈られた扁額「克勤克儉」
(「全村禁酒で村おこし」)

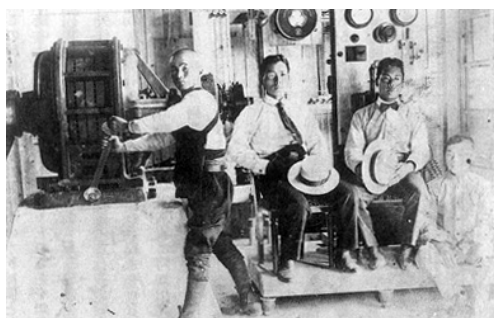
18年8月、病のため辞任した。戦後は三穂村農地委員会委員長などを勤め、37年8月、77歳で逝去した。

三穂村の村営電気事業



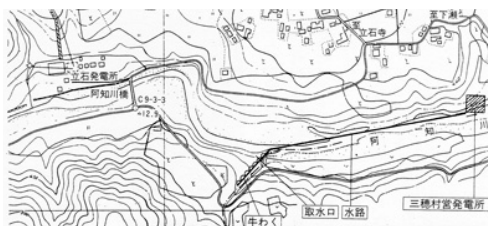
玉置駒太郎村長
(三穂地区自治センター蔵)

飯田町や周辺村落到に電気が点いても三穂村には電気が点かなかった。大正8年、村長玉置駒太郎が検討を始めた村営電気事業は、村政の重要施策として歴代村長が推し進めた事業であった。天竜川下流の阿南地区7ヶ村が南信電気を計画(同9年4月開業)して、三穂村にも参加を呼びかけたが、村は中沢村で村営事業が進んでいたことに注目し村営の道を選んだ。8年3月、郡長鈴沢卯吉が部落有林統一の件で来村した際、村営電気事業創設への協力を依頼し快諾を得た。



村営発電所の技師
(中部電力飯田支社『伊那谷電気の夜明け』)

鈴沢郡長の支援もあり、大正8年11月、阿智川の河水利用につき県知事の許可、9年1月には電気事業経営につき通信大臣の許可が下り、10年4月に村営立石発電所(35kW)の建設に着工、11年5月には村を挙げて落成祝賀式が催された。当初は3万円の予算で計画されたが、最終的には12万円がかかった。この資金は村民の寄附によってまかなわれた。発電所の維持には苦勞した。特に堰堤は牛柵といわれる仮の設備で、大雨が降ると流され、何日も暗闇の生活を余儀なく



三穂発電所・立石発電所地図
(『全村禁酒で村おこし』)



村営立石発電所跡地の案内看板(筆者撮影)



立石発電所放水口跡(岡部忠美氏提供)



村営発電所水路跡(三穂地区自治センター蔵)

された。発電所は大修理を必要とする状態になっていた。

矢作水力からの無償電力

昭和2年4月、矢作水力は村営発電所の主流に、三穂発電所(6000kW)を計画し、村に協力を求めてきた。村では助役の林が中心になって矢作水力との交渉にあたり、4年10月、7000円の補償金と15kWの無償電力の供給、さらに第二発電所が建設された際に50kWの無償電力を供給するという契約を交わした。三穂発電所は5年3月に運転を開始した。6年9月に矢作水力と需給契約を交わし、さらに最大50kWの常時供給と第二発電所が許可時に無償電力50kWの供給が約束された。これを受けて、6年12月、村営発電所を休止し、矢作水力からの受電によって村営事業を運営する態勢に変更した。



矢作水力の建設した三穂発電所(筆者撮影)



三穂発電所ダム(筆者撮影)

50kWの無償電力は、第二発電所の許可が条件だったので、村では矢作水力、長野県庁、逓信省への陳情を繰り返した。林の叔父で朝鮮郵船社長を勤める森井治郎の計らいで、「逓信省電気局長ニ対シ促進方御進言ニヨリ急転直下、一切書類ノ調査始マリ」(『三穂村村営電気沿革史』)、昭和10年1月、待望の認可となった。これにより、三穂発電所の存



「三穂村村営電気沿革史」・「電気日誌」(三穂地区自治センター蔵)



「三穂村営電気書類」(三穂地区自治センター蔵)

続中50kWの無償電力が確保できた。村では割安の料金で村内に供給するとともに、公共施設、神社仏閣、街灯、門灯などの電気を無料化し、「日本一安く、日本一明るい村」と言われた。遠州街道を夜間旅する人が、街灯や門灯があかあかと点く三穂の村を飯田町と間違えてやってくることもあった。村営電気事業は、村に年間3500円ほどの収益をもたらした村の財政に大きく貢献したが、18年3月、電力の国家管理により中部配電に統合された。

村営電気の中心となった林治郎は、計画が持ち上がると村営電気創設研究委員(7人)に選ばれ、事業開始後も主任書記として事業に関与し、特に助役、村長となってからは矢作水力との交渉を通して無償電力を確保するなど、村営電気の創設、運営、発展に貢献した。歌をたしなむ林は、村営電気について「あちを行く水のながれは火となりて隈なくおらを照らすなりけり」と詠んでいる。

(浅野 伸一)